

オープンイノベーションと 実証実験

東日本旅客鉄道株式会社 技術イノベーション推進本部 企画部門 部長

浦壁 俊光



「現在は100年に一度の変革の時」ということが様々な場面で語られています。今の時代はこれまでにないスピードで技術革新が進んでおり、それに乗り遅れると企業は生き残っていけないと警鐘を鳴らすための、一種の枕詞ということでしょうか。

技術革新を巻き起こす主要な道具としては、「人工知能(AI)」「IoT」「ビッグデータ」などが挙げられます。実際、いわゆるGAF(A: Google, F: Facebook, A: Amazon)に代表されるように、現在著しく成長を遂げている企業はビッグデータをうまくビジネスにつなげているところが多いと、誰もが実感されているのではないのでしょうか。おそらく、コンピュータ技術が成熟してきたことにより、今までできなかった大量のデータ分析が比較的容易にできるようになったことが背景にあるのでしょうか。

同じく、最近目にするが多くなった用語に「実証実験」というものがあると思います。経済紙や工業系新聞では掲載されない日がないくらいです。

例えば、「自動運転」や「無人店舗」の実証実験を実施、というようなものです。定義としては、特定の場所で限られた期間、将来有望なビジネスモデルについて実施する実験、ということになるでしょうか。

なぜ、このような状況になっているのかと考えると、キーワードは「オープンイノベーション」ということになると思います。同じく「アジャイル (agile: 素早い)」という用語もキーワードになるでしょう。

今の時代、技術革新によって変革を成し遂げるには、一企業だけの取り組みでは不可能であると皆が考えています。別々の得意分野を持つ企業同士がともに新たな価値の創造に向けて手を取り合い、一緒に取り組んでいかなければ、求められるスピード感で成果を得ることはできないでしょう。

私の会社でも現在、様々な企業の皆様と多種多様な実証実験に取り組んでいます。事前調整はもちろん大切ですが、このような活動においては細かな部分にこだわって打合せを重ねるよりも、まずできることだけでも実施してみることが大事だと考えています。小さく始めることで参加企業の視点が揃い、今後取り組むべき課題が明確になってきます。

打合せだけでは各社遠慮もあり、なかなか課題が明確にならないのが実態だと思います。そうした時こそ、「アジャイル」に実証実験を繰り返すことで「オープンイノベーション」を追求する参加企業の足並みや方向性が揃い、結果として新たな価値を創造するというゴールに最も早くたどり着くことができるのではないのでしょうか。

もちろん、実証実験をただ繰り返すだけでは何の意味もありません。様々な実証実験の中から有望なテーマを選び出し、それを実際のビジネスにつなげていかなければなりません。ここが最も困難な作業になります。今まで世の中になかったものを実現することになりますので、法規制の問題や異常時のオペレーションの問題等、整理すべき課題は多岐にわたることが予想されます。

実装に向けた様々な課題の解決には、実証実験に取り組んだ企業以外の協力も必要になるかもしれません。この部分も一企業だけでは突破できない「カベ」になると思います。実装を妨げる課題を早めに洗い出し、解決に必要なプレイヤーを逐次巻き込んでいかなければなりません。非常に骨の折れる作業になりますが、この部分で諦めず、いかに熱意を持って周りを巻き込んでいけるかが、新たな価値を創造するための一番のポイントであるという気がしています。

(筆者は当会常任理事)